■研究十二月往来〈264〉

「橘の内裏」考

高橋悠介

世阿弥や金春禅竹は、日本で秦河勝によって初めて猿楽が行われた場を「橘の内裏」と考えていた。『風姿花伝』第四神儀では、神代における天岩戸神楽に猿楽の起源を求めた後、天竺では釈迦の説法の妨害者を鎮めるために猿楽の道が始まったことを説き、日本では聖徳太子の仰せにより秦河勝が始めたとする。

上宮太子、天下少し障りありし時、神代・仏在所の吉例に任て、六十六番の物まねを彼河勝に仰せて、同じく六十六番の面を御作にて、則河勝に与へ給ふ。橘の内裏紫震殿(宸)にてこれを勤ず。天下治まり、国静かなり。

また、禅竹の『明宿集』には、

昔、上宮大子(太)ノ御トキ、タチバナノダイリニシテ、サルガクマイヲソウスレバ、クニヲダヤカニ、テンガタイヘイナリトテ、ハダノカウカツニヲウセテ、シヽンデンニテ翁ヲマフ。

などとみえ、神儀篇は円満井座の伝承に基づく可能性が指摘されている。この「橘の内裏紫震殿」という一見不可解な言葉は、どのように理解したらよいのだろうか。

新編日本古典文学全集では、神儀篇の「橘の内裏」の頭注で「聖徳太子生誕の地とされる橘寺(奈良県明日香村)に内裏があったと誤解しての文」とする。推古天皇は豊浦宮(とゆらのみや)で即位し、十一年目に小墾田宮(おはりたのみや)に遷ったが、その推定位置はもちろん橘寺とは違う。しかし、橘寺の地にかつて内裏があったとする説は、鎌倉後期に成立した聖徳太子伝の勝鬘経講説に関する注釈記事の中にみえており、史実とは違っていても、中世の橘寺においては正統な説とされていたようだ。

太子の勝鬘経講説に関する『日本書紀』推古天皇十四年条の記事は、

秋七月に、天皇、皇太子を請(ま)せて、勝鬘経を講ぜしめたまふ。三日に説き竟(を)へつ。

という簡略なもので、橘寺のことはみえない。しかし『聖徳太子伝暦』では、太子が講説を終えた夜に蓮華が降り、翌朝この奇瑞の奏上をうけた天皇が積もった蓮華を見に出かけ、その地に建立したのが橘寺である、という風に話がふくらむ。この話は『三宝絵』や『今昔物語集』など多くの説話集に収められ、図像化もされた。そして講説が行われた内裏を橘寺にしたとする説が、鎌倉後期から太子伝にみえるようになる。橘寺長老の法空がまとめた『上宮太子拾遺記』第四では、勝鬘経講説の記事の中に、

天皇則命レ駕、移二岡本宮一。爰、太子任二綸言一、以二禁裏一為二伽藍一。就レ中於二清涼殿一者、不レ改二本殿一、被レ点二大講堂一。案置以二赤栴檀釈迦小像一。

とあり(大日本仏教全書)、天皇が誓って建立した堂宇が今の橘寺だとする文を続けて引いている。これを総合的に読むと、太子が天皇の意を受けてそれまでの内裏を橘寺の伽藍とし、清涼殿を大講堂にしたということになってくる。『書紀』で勝鬘経を講じた場が明記されないのに対し、直後に法華経を講じた場が岡本宮とされていることがこうした伝承の背後にある可能性や、豊浦宮の跡が寺になったことと混同した可能性なども考えられよう。

さらに、こうした説は文保本系太子伝の諸本においてより明確に説かれる。「文保本系太子伝」とは、文保元年(一三一七)や文保二年などを基点に年を計算する記事があることから、十四世紀初頭には成立していたと思われる太子伝の系統である。例えば、鎌倉後期の古写本が残っている光久寺本『正法輪蔵』では、橘寺の講堂はもと欽明天皇から推古天皇までの五代の皇居の清涼殿で、そこで勝鬘経が講じられたという(日本庶民文化史料集成)。

尋二レハ会場一ヲ、今ノ大和国橘寺之講堂是也。彼ノ橘寺ト申ハ、従二リ欽明天皇一至二テ推古天皇一ニ、五代ノ皇居也キ。時ノ帝推古天皇ノ内裏於二清冷(泠)殿一有二リキ御講行一。

同様の説は文保本太子伝諸本や、後代に成立した橘寺の略縁起『橘寺縁起』(大日本仏教全書所収)などにもみえ、広範に流布したと思しい。そして『正法輪蔵』では、太子がこの

所は「先仏転法輪之古跡」であると奏すると、天皇からは、皇居を太子に奉るので伽藍仏閣と執り成すように、と仰せがあり、岡本南宮への遷宮があったという。

時ニ太子彼ノ内裏ヲ造リ成シ寺ニ給テ、名ヲ菩提寺ト給ケルハ、今ノ橘寺是也。彼ノ古ヘノ清冷殿ハ、橘寺之七間四面ノ大講堂是也。（中略）従リ欽明天皇之御代人皇六十五代、其ノ年記七百三十七年也。未タ朽チ傾カ、昔ノ清冷殿ニテ侍ル也。

というように、橘寺に昔の清涼殿がそのまま残っていることも強調されている。

服部幸雄氏は「橘の内裏紫宸殿」という言葉について、紫宸殿南庭の橘の樹の地が秦河勝の旧宅であるという『江談抄』の説や、大内裏は秦河勝の宅・橘本大夫の宅の旧跡であることにより南庭に橘を殖えているという『拾芥抄』にみえる説から考察している（「宿神論（中）」、『文学』四三―一）。しかし、後述する〔室町〕写・四天王寺蔵太子伝には「橘之宮之清涼殿」という表現もみえており、直接的には、内裏を橘寺にしたという太子伝の説が猿楽伝承に流入したと考える方がよいのではないか。伊藤正義・牧野和夫・阿部泰郎各氏の指摘するように、日本における猿楽起源伝承は中世太子伝の伎楽伝来説話を組み変える形で成立している。『教訓抄』巻第四に「古記曰」としてみえる、伎楽が橘寺のほか太秦寺や天王寺に置かれたという伝承が知られているように、伎楽に縁ある橘寺は秦河勝が聖徳太子の仰せにより猿楽を始めた場と設定するのにふさわしいわけだが、そこがもと内裏であったという説もやはり太子伝にみえるのである。ただし、いま確認した太子伝では講説の場としての清涼殿にしかふれていないので、猿楽伝承に「紫宸殿」が出てくる理由は、『江談抄』や『拾芥抄』の記事を考え合わせることで理解しやすくなろう。

橘寺の地に内裏があったという説は、おそらく鎌倉期に橘寺を復興した律宗の僧によって喧伝されたのではないだろうか。この寺を律院にしようとした住僧の敬願房は、叡尊や円照といった律僧の支援を得て法隆寺の太子言説を大きく塗り替えた顕真とも付き合いがあったようで（林幹彌氏『太子信仰の研究』）、律院としての開山には戒律復興運動で名高い覚盛の弟子・戒学を迎えている（『太子伝玉林抄』二）。橘寺の荒廃と復興については、もと橘寺にあった四天王寺蔵『聖徳太子伝』三十五歳条に、

而ニ執行之成阿弥陀仏寺内之在家ヲ出テ四壁ヲ築キ、十方ヲ勧進シテ再興ス。京之東山大谷ト云所ヲ勧進所トシテ暫ク居シケリト云々。又、豊浦ノ慈性房・教乗房、金堂之後壁之絵ヲ曼陀羅ニ写シ、同太子ノ十六歳ノ御影ヲ入洛シ奉テ、大功ヲ成就シタリキ。彼ノ勧進所ヲ寺ニ成テ、太子堂申候也。院号ヲ速成就院ト云々。

と詳しい（中世聖徳太子伝集成）。成阿弥陀仏は慶政などと連繋して法隆寺の勧進・修造も行っている勧進比丘尼である。西大寺流律宗の京都における拠点として知られ、鎌倉幕府の認める関東祈禱寺となり、後には足利尊氏の祈禱所ともされた東山太子堂（速成就院）は、文永三年（一二六六）に律寺としての結界儀礼を行っているが（松尾剛次氏「京都東山太子堂考」、『戒律文化』第五号）、その前身は橘寺復興のための勧進所であったというのである。「太子ノ十六歳ノ御影」とは橘寺長老の法空が夢想に基づき仏頭山上にあった鷲の形に似た老松を御衣木として造ったもので（『玉林抄』一二）、京に出開帳の勧進を行ったようだ。このように太子信仰を基本にして復興がなされた際、橘寺がもとは内裏であり太子により勝鬘経が講じられたという説は大きな効果を持ったことだろう。

以前、円満井座の舎利の太子伝来伝承は、律宗の教興寺の舎利に関する縁起説を転用したものであろうと指摘した（『ＺＥＡＭＩ』三号）。『明宿集』では中世の祖師としては唯一叡尊にふれて翁であるとするが、禅竹が猿楽者に参詣を勧める広隆寺の桂宮院も叡尊の弟子の澄禅が復興した律院であり、また禅竹の『六輪一露之記』に注を加えた東大寺戒壇院の志玉も華厳・律兼学の僧である。禅竹が複数の太子伝を見ていたことについては牧野和夫氏の指摘があるが、そこに篤い太子信仰を持っていた律のネットワークが絡んでいた可能性は高いだろう。秦河勝をめぐる猿楽伝承の生成の謎を解くヒントも、こうした律宗と猿楽との繋がりの周辺にあるのではないだろうか。

なお、橘寺を取り上げた能作品や、金春八郎元信の橘寺勧進能の問題について、表きよし氏に「橘寺と能―散佚曲〈仏頭山〉・番外曲〈橘寺〉を中心に」（『説話文学研究』第三十四号）の御論があることを付け加えておく。

（法政大学能楽研究所所員）